決して人の物持て還るにはあらぬぞよ」

と云ひ足したり。

世には名も知れぬものゝ裡にも、德ある者もあるものよ、之れ果して眞の市井の細民か、世を外にせる徒か、

教ふるにも道あり、正しからざるべからず、導くにも方あり寛嚴宜しきを制せざるべからず、法に泥めば道死し、道に拘はれば人死す、寛嚴は手心なり、方法は規矩なり、泥まず拘はらず、運用の妙存す、人を造るものゝ、尤も難しとする所なるを、今此の靴工果して何者ぞ　法を持する正にして枉げず、道を行ふこと優にして迫らず、曲げず殺さず以て中道を制す、實に教育の極致を得たるものにあらずや感ずるまゝに記す。

貞一の日記

（承前抜萃）（明治卅六年五月生男兒）

その母

明治卅九年一月二日　父と渡部の伯母さんの許へ、年始に行き、百合子さんが、まだ着物もきかへず居るを見て、變なおべゝ、こわい〳〵といつて、傍へもよらずやがて、着物をかへたれば、喜んで傍へ行つて、ヴアイヲリンを彈かしてもらふ、年玉に反物を、百合子さんに上ると、これ母さんもらつたのおべゝといふ、母が他よりもらひし物なりと、いふ意味なり、夜、ランプ臺を見て、ランプの腰掛といふ、

一月五日　此頃唱歌を、自分で作りかへて唱ふ、おとーさん、おかあさん、はやくでゝごらんよの歌を、おぢいさん、おばさん、雀〳〵の歌の終のさよなら、みなさんチウ〳〵を、さよなら、貞

チャン、かへりませう、など似よつた、語をはめかへて唱ふ。

一月十日　夕飯の後、父が、變な節で、梅の白妙と、唱ひ出すと、ちがふ〳〵といつてやめさせ、母にうたはせて、ちがはない〳〵といふ。

一月十九日　劍を拔いて、進め〳〵、といふ歌を唱ふ樣になりてから、佐々木先生に頂いた劍を、大變好きになりて、外に行く時は、大抵腰に下けて行く。

一月廿四日　此頃、父の不在中、父の兵兒帶を、前かけの上にしめ、チッチャイ、トーサンといつて、父のかへるまでは、どうしてもとらず、チッチャイ、トーサン、と呼べば、キコエナイ、といつて、返事せぬ事あり。

一月廿九日　母が、おうちに、赤チャンが生れて、

母さんが、赤さんと、ねんねしたら、貞チャンは、誰とねるときけば、だまつて居る故、父さんとかときくと、父さんは、一人で、貞チャンと、赤チャンと、母さんとねるといふ、

一月卅一日　ローレライの歌を一番の半まで唱ふ父が唱ふ獨逸語のを、きゝかぢりしなり、

二月二日　繪はがき帖の繪葉書を、一枚〳〵拔きとり、小兒が浴みして居る圖を見て、コレしいチャンだから歌を敎えて上るといつて、豐太閤の歌を、初から終まで、眞面目に唱ふ。

二月六日　此頃は、どういふものか、パンをいやがつて喰べず殘す故、今日より飯に代ふ、

朝（七時）牛乳七五瓦、飯一椀　味噌汁少量

晝（十一時）飯、鷄卵（半熟）一個、磯部せんべい二枚、おやつ（二時）牛乳七五瓦、パ

ン二切

夕（五時）飯二椀、煮肉、ウエファース二枚

二月十一日　此頃は大分惡戯を覺え、父外出の時玄關へ送り出で、父の靴をはいて居る間に、そつと、そこに置ける、手袋や帽子を持つて逃けて行く、今日は午後父と安田さんが、庭の雪を掻くを見て。自分も靴をはいて出で、仝じ樣な眞似をなす。

霜燒けにて、醫者より藥をもらふ。

二月十三日　今日渡部の百合子、遊びに來り居る時、何時覺えしか、ハイカラといふ語を覺え、百合子さん、ハイカラ、貞チャンも、ハイカラにして頂戴といふ、百合子、自分の櫛をとつてさしてやりしに、直にとつて捨て、なほ何か取りて捨てる樣な、手付をする故、何して居るのときけば、ハイカラすてる、あゝまだおべゝについてると、拂ひ捨る眞似をなす。

二月十七日　父と湯屋に行き、衣服を着る時、男の子二人、兄弟と見ゆるが、ピョコ〳〵跳ねまわつて、戯れ居て、弟の方が貞一の方へ、近ついて來ると、こわい〳〵と父に抱きつく、家にかへりても、こわかつたといふ兄さんがどんな事したときけは、コンナ事といひながら、立つて眞似をなす。

二月十八日　唱歌を作りかへて唱ふ事大好きにていろ〳〵おもしろい事をいふ今日は。

とーさん〳〵、はしれ、大きなとーさんは、たかく、ちいさなかーさんは、ひくゝ、なかよくあそべ、とかり〳〵の節にて唱ふ